

4 技能をバランスよく行う授業 Design の研究

英語の回路の形成をめざして

英語科研究会議

遠藤 英磨¹

鈴木 順子²

安田 健二³

瀬崎 美帆⁴

要 約

学習指導要領では、「基礎・基本の定着」と、「実践的コミュニケーション能力の育成」をめざし、言語の実際の使用場面に配慮した指導を求めており、週3時間の授業の中で効率よくかつ効果的に行う必要がある。また、保護者や生徒の英語教育に対する Needs も、より多岐にわたるようになってきた。それらを総合的にとらえた上で、英語教育に求められていることや、これからの英語教師にとって最も大切なことは何かを探っていきたいと考えた。そこでまず、本市の実態を知るためにアンケートを実施した。その結果、Input、Output 活動の工夫 教科書の扱い方 授業内容 基礎学力の定着 学習に意欲をもたない生徒への指導、が課題であることがわかり、授業 Design の研究に集約されてくるだろうという結論に達した。そして英語の回路を形成させるための、よりよい授業 Design とは一体どういうものであるのかを考え、研究のねらいを設定した。その際に留意すべき内容として、教材の開発、バランスの設定、生徒の学習への動機づけ等を考慮しながら、1ユニット(Lesson)の検証授業を2校同時に実施した。その結果、魅力的な教材の普遍性、Routine 活動の有効性、生徒の心の変化、教科書を用いた Output 活動の有効性、到達目標との関連性、新たなバランスの発見、教師の意識の変容だけでなく、1ユニットを授業 Design したことによる利点などの成果を見取ることができた。

キーワード：英語の回路、Input、Output、バランス、授業 Design

目 次

主題設定の理由	82	5 予備授業とその考察	88
1 英語教育に求められていることと川崎市の課題	82	6 検証授業とその考察	89
2 よりよい授業 Design とは	83	研究のまとめと今後の課題	95
研究の内容	85	1 研究から見てきたこと	95
1 キーワードの説明	85	2 今後の課題	95
2 研究のねらい	85	参考文献	96
3 研究のねらいを検証するに当たって留意すべき内容	86	指導助言者	96
4 活動の基本となる教材を開発する上での留意点	86	研究協力者	96

¹川崎市立南加瀬中学校教諭(長期研修員)

²川崎市立犬蔵中学校教諭(研修員)

³川崎市立西高津中学校教諭(研修員)

⁴川崎市立白山中学校教諭(研修員)

主題設定の理由

1 英語教育に求められていることと川崎市の課題

学習指導要領(New Course of Study)では、国際人としての資質・能力の基礎を養う観点から、「基礎・基本の定着」と、外国語における「実践的コミュニケーション能力の育成」にかかわる指導のより一層の充実、さらにその目的のため、言語の実際の使用場面を配慮した指導を求めている。ここで用いられている「基礎・基本」と「実践的コミュニケーション能力」とは何なのだろうか。

基礎・基本については様々な考えがあるが、本研究会議では次のような観点でとらえてみた。つまり基礎とは、「相互理解や友好、共生のために積極的に言葉を使って Communication を図ろうとする態度」とし、基本とは、「理解の能力、表現の能力、言語や文化に関する知識・理解」のことであるとした。

また、実践的コミュニケーション能力については、「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけでなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のことである¹⁾」と中学校学習指導要領の解説にある。しかし、本研究会議ではもう一歩踏み込んで、「単なる日常会話だけでなく、内容のある話についての互いの意思の疎通も含めたものである」と定義づけた。さらに、必要な言語の Rule や語彙、表現を頭の中からすぐに取り出すための「英語の回路」を形成しているかどうか、Communication 能力の有無を示すものとする。

ではこの英語教育に求められていることが、生徒にどの程度浸透しているのだろうか。研究を立ち上げて間もなく本市の生徒の実態を把握するためにアンケート(中学3年生 167名)を行った。

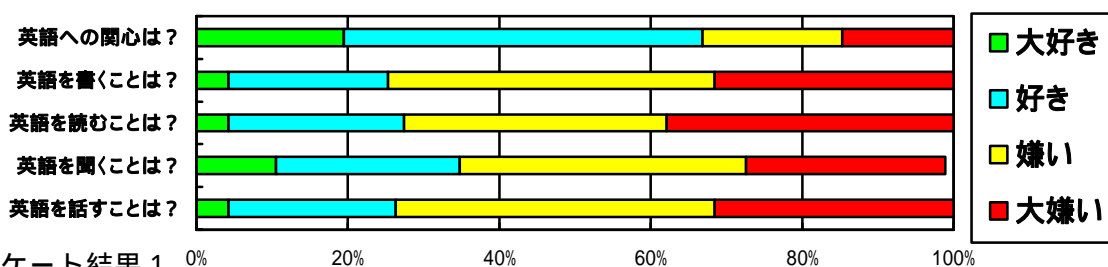


図1 アンケート結果 1

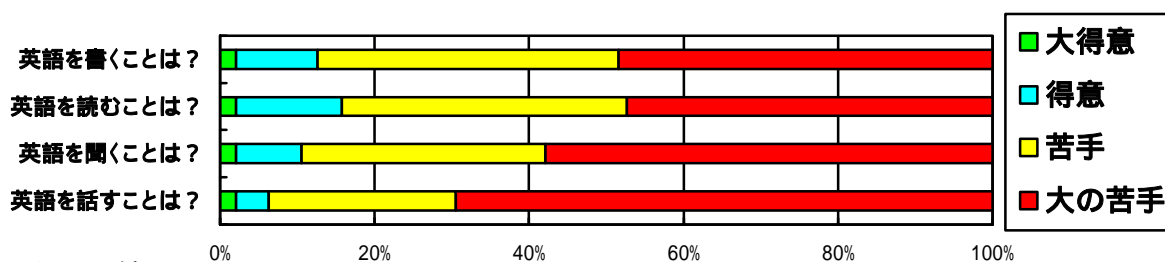


図2 アンケート結果 2

図1、2を見ると、英語に対して興味があると答えた生徒は、実に7割近くを占めており、関心の高さがうかがえる。しかしその一方で、授業に対してはどの技能についても好きだと回答した生徒は全体の4割を下回っており、得意かどうかになると、さらにその半分以上まで落ちてしまっている。ましてや話すことになると、自信のある生徒は1割にも達していない。なぜこうなるのであろうか。

そこで本研究会議でその原因を考えたところ、次のようなことが予想として挙がった。1. 活動の質が生徒の知的 Level に合っていない。2. 活動が知的好奇心を満たすものではない。3. その活動を行うのに十分な Readiness がなされていない。4. ワンパターンの活動しか行っていない。5. 達成感・充実感を味わわせる活動ではない。6. そもそも活動を行っていない。

これらの予想を確かめるために、川崎市立中学校の英語科教師にアンケートを依頼し、全51校中50校から回答をいただいた。まずそもそも Communication 活動を行っているのか、について尋ねた。

¹⁾文部省 『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説 外国語編』 東京書籍 2000

表1 日頃の授業 Style は・・・(複数可)

	総計
教科書中心	85.2%
Communicative Activity 中心	57.4
話し合い活動中心	5.6
その他	3.7

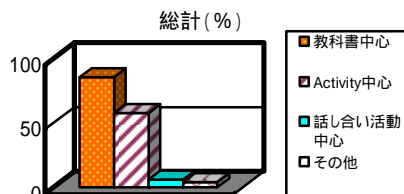


図3 日頃の授業 Style は・・・

表1からは、教科書を中心に授業を行っている様子を読み取れる。では、Communication 活動の質はどうなのであろうか。当然、教科書を用いた Communication 活動も多く行っているだろうと考え、今度は教科書の扱い方を尋ねた(表2)

表2 教科書をどのように扱って指導していますか。

20代	読み聞かせ / 文法指導 / 本文内容の Listening 指導 / 内容確認 / Reading 指導 / ロールプレイング / 訳読
30代	Reading 指導 / 語彙指導 / 内容確認 / ペアワーク / Listening 指導 / 異文化理解 / 訳読 / 慣用表現の確認 / 新文型の導入
40代	Reading 指導 / プリントにして / 内容確認 / 語彙指導 / 慣用表現の確認 / T・F Questions / スキット / 訳読 / 内容ごとに重みづけをしている。 / 日本語訳の提示 / 新文型の導入 / Q&A / 中心
50代	新文型の導入 / 内容確認 / 中心 / Reading 指導 / 訳読

どの年代も共通して行っていることは文法指導、訳読、内容確認、Reading 指導等である。具体的な Communication 活動の内容は残念ながらわからないが、これらの指導の工夫は検討していく必要がある。なぜなら、すべての年代で行われているということは、前述した生徒のアンケートの結果に深く関わっている可能性が高いからである。また、Speaking 活動だとわかる活動が少ない。つまり活動は教科書中心で行ってはいるが、技能面の Input には偏りがあり、特に Speaking を中心にした Communication 活動はあまり行っていないといえるのではないだろうか。このことから教科書を用いながらの Input、Output 活動の工夫に課題の一つがありそうだと考える。さらに本市の現状に即した研究をするために、次の質問を行った(表3)

表3 日頃の授業の中で、困っていること、悩んでいること等を聞かせてください。

20代	時間数が少ない / 生徒の意識づけ / 評価 / 教科書の扱い方(複数回答) / インタビューテストの時間確保 / 「書くこと」の指導 / Activity をさせる上での引き出しがない(複数回答) / 観点別評価「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を測るための工夫(複数回答)
30代	教科書を進めるので精一杯 / 教科書の扱い方(複数回答) / 授業内容(複数回答) / 基礎学力の定着(複数回答) / 英語嫌いな生徒が多い(複数回答) / 家庭学習の定着 / Communication 能力の育成 / 授業が成立しないクラスがある / 言語活動の工夫 / 複数の教員で指導する際の苦勞(複数回答) / 学力の低い生徒をどうやって参加させるか(複数回答) / 学力差が大きく、どの生徒のレベルに合わせたらよいか苦勞している
40代	授業を楽しく行う工夫が欲しい / 教員間の打ち合わせ / 基礎学力の定着(複数回答) / 教材研究の時間の確保 / より効果的な導入の方法 / 授業設計について(複数回答) / 学習に意欲をもたない生徒への指導(複数回答) / 観点別評価「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を測るための工夫 / 落ち着いた雰囲気です授業を受けられる環境づくり
50代	時間数が少ない / 新しい Idea が出ない(複数回答) / 自分の意見を言えるようにするための工夫 / 学習に意欲をもたない生徒への指導(複数回答) / 学力差が大きく、どの生徒のレベルに合わせたらよいか苦勞している / 課題をまったくしない生徒への対応(複数回答) / 評価をいつも考えなければならないのが大変

「教科書の扱い方」「授業内容」「基礎学力の定着」「学習に意欲をもたない生徒への指導」等が世代を越えて幅広く挙げられている。

以上のことから川崎市の現状として、Input、Output 活動の工夫 教科書の扱い方 授業内容 基礎学力の定着 学習に意欲をもたない生徒への指導、が課題であることがわかった。さらに本研究会で検討した結果、これらはすべて授業 Design の研究に集約されてくるだろうと考えた。

2 よりよい授業 Design とは

では、よりよい授業 Design とは一体どういうものなのであろうか。そこでこの問題を解決するために、理論面を含めた次の4点から考え、より具体的な主題を設定することにした。

(1) S L A 研究 (第二言語習得研究) より

まずは最先端の研究がなされている第二言語習得 (SLA) 研究について調査した。その中に「 文法形態素は教科書順には習得しない。 Pattern Practice には一時的な効果しかないため、継続的な反復練習が必要である。 言語習得には 4 技能すべての訓練をバランスよく行うことが必要不可欠である。 外国語環境では Input 量が圧倒的に少ない。 「多読万能説」は迷信である。 教師が直す生徒の英作文や発話の誤りは短期的しか効果が見られない。 動機づけが高いと第二言語能力が伸びる。」³⁾という報告がある。よりよい授業 Design を構築するための Hint としてとらえることができる。

(2) 「これからの授業づくり」より

よりよい授業づくりは、教え込みを中心とした授業 (できる)、主体的な学びを中心とした授業 (わかる)、協働的な学習を中心とした授業 (わかり合う) の 3 点が、1 時間の授業に混在しながらつくられるべきである。そしてこれまでの授業づくりで一番問題だったのは、「教えないで考えさせる」授業なのである⁴⁾。ここで言う「教えないで考えさせる」授業とは何か。英語科で言えば「Input しないで Intake させようとする」授業のことであろう。したがって「教えて、考えさせる」授業を示すことで、バランスの取れた Input をさせるとともに、Output のための土壌づくりを行うことができると考える。そこで、よりよい授業 Design の解釈の一つとして、上述の「できる」「わかる」「わかり合う」授業観をバランスよく取り込めるように、様々な角度からの教材を開発する必要があると考える。

(3) 授業設計のための Approach より

授業設計のための Approach には、教師の指導技術を磨くことでより精度を高めていく英語教授力 (Bottom-up Approach) と、指導目標を明確にもちながら試行錯誤する授業改善策 (Top-down Approach) の 2 種類がある⁵⁾。そこで本研究会議では、よりよい授業 Design を考える上で、後者の Approach を考えていくことも必要だと考える。そこで検証授業を行う際には、各ユニット (Lesson) ・毎時間の短期的到達目標を設定し、それを基にした授業 Design を構築、検証していく。

(4) 優れた実践例の分析より

優れた実践例を分析すると共通点が多数浮かび上がってくる。すなわち 子どもの内部で動いていることを教師が感じ判断し即座に対応できる。自分に合った授業 Style を構築している。明確なねらい (長・中・短期的到達目標) をもって活動を仕組んでいる。 (Top-down Approach) 確かな指導技術をもち授業の精度が高い。 (Bottom-up Approach) 生徒の興味や関心、Needs に応える授業を展開し、知的 Level をより高めるための授業経営をしている。様々な角度から切り込める創造力、Idea がある。英語力がある、などである。そこで本研究会議では、共通点のうち、の短期的到達目標、の授業 Planning、の多角的な教材開発に焦点を絞り研究することで、よりよい実践のための一助となるのではないかと考えた。なぜならそれ以外の条件については、教師自身の努力と研鑽、そして各学校の実態把握が複雑に絡んでくる問題であり、研究するには時間的に困難であると考えたからである。

以上の 4 点から、生徒に英語の回路を形成させるためには、教材を工夫し 4 技能をバランスよく習得させるための授業 Design を研究することが、もっとも効果的なのではないかと考え、研究主題を次のように設定した。

「 主題 4 技能をバランスよく行う授業 Design の研究 英語の回路の形成をめざして 」

³⁾白畑知彦 他 『英語習得の「常識」「非常識」』 大修館 2004

⁴⁾川崎市総合教育センター カリキュラムセンター 室長 竹田文夫 12/6/05 の室会にて

⁵⁾高橋一幸 『授業づくりと改善の視点』 教育出版 2003

研究の内容

1 キーワードの説明

英語の回路とは、必要な言語の Rule・語彙・表現を Input したものを、脳内で Intake (理解可能になった Input を生徒の頭の中に取り入れ) させ、Output に至るまでの道筋であると、本研究会議では定義している。この回路により言語運用能力が培われていくのである。

また、授業 Design を設定する上でのバランスが大切になる。これは前述した SLA 研究の「言語習得には4技能すべての訓練をバランスよく行う必要がある」という結論を受けてのことである。本研究会議では、このバランスには2種類が存在していると考えている。すなわち Input 部の4技能のバランス、1ユニット (Lesson) における Input と Output のバランス、がそれらである。

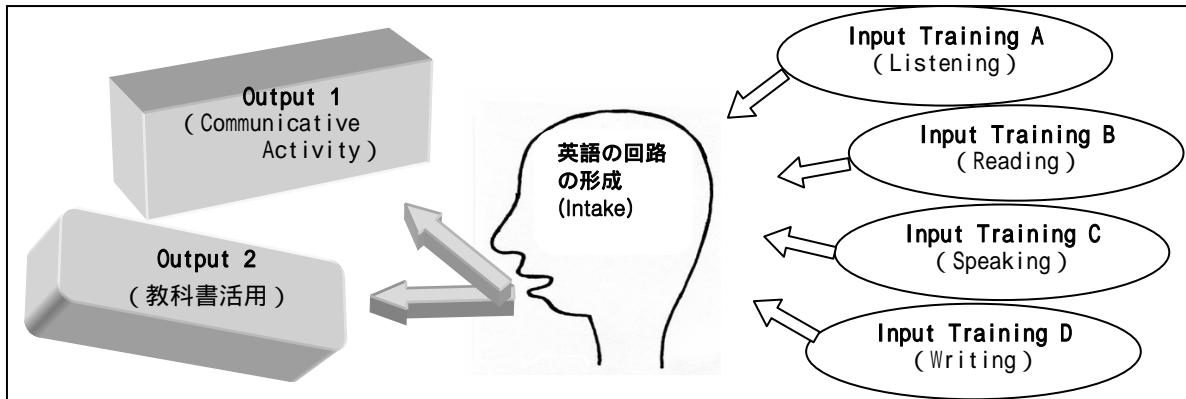


図4 言語習得の形成 Model

2 研究のねらい

そこで授業 Design のあるべき姿を探るにあたって、研究のねらいを次のように設定した。

- (1) 4技能にかかわる活動をバランスよく取り入れ、それを継続的に実践することにより、基礎・基本を獲得し、生徒に Intake させるには、1ユニットをどう構成するとよいか。
- (2) Input 活動と思考しながらの Output 活動をバランスよく取り入れることで、回路 (Intake) 形成の発達を促し、実践的 Communication 能力をはぐくんでいくには、教科書をどう活用し、他にどんな課題を利用して、1ユニットの学びをどう構成すべきか。
- (3) Input、Output にかかわる多様な活動を、1時間の授業の中にどう配置するか。
- (4) 1時間の授業の中で、どのような課題を用意し、どんな活動場面を設けると、生徒は意味のある状況と感じ取り、くり返し練習するように動機づけられるか。

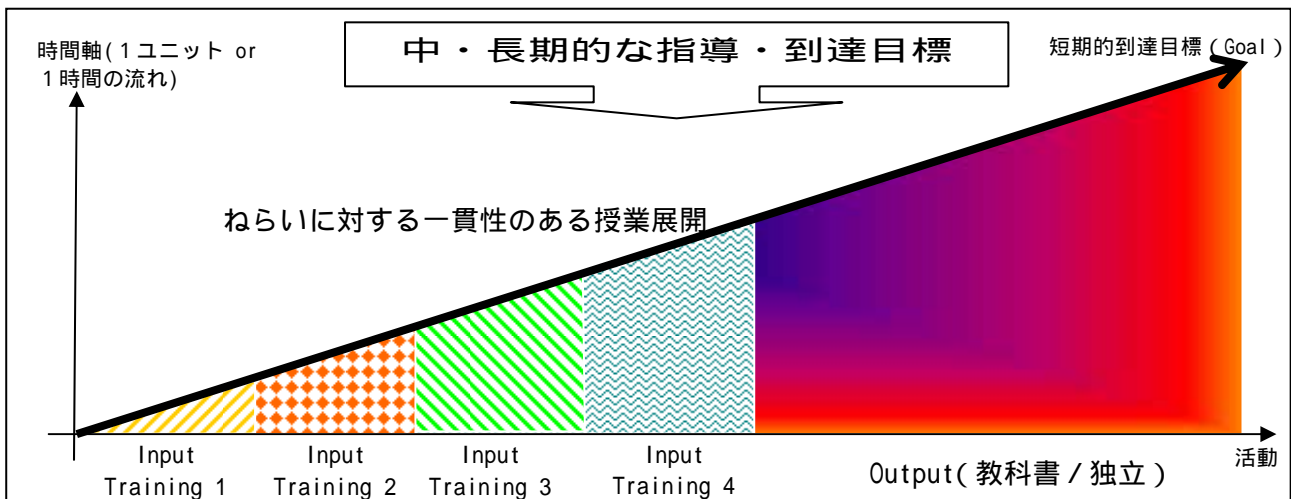


図5 1ユニット、1時間の授業の構想

さらに、研究のねらいを検証するに当たっての留意点を次のように考えた。

3 研究のねらいを検証するに当たって留意すべき内容

1 ユニットとその時間の到達目標を設定し、それぞれの活動に関連性をもたせる。

教材は1ユニットの到達目標に合わせて Choice できるよう、様々なものを用意する。

教材は基礎・基本の定着と Communication 能力の向上をめざしたものをそれぞれ開発する。

教材は誰でも気軽に扱えるだけでなく、中・長期的な到達目標をにらんだ、変化をつけやすくくり返し使えるものにするよう工夫する。

Output では、設定した到達目標に向けて Input させたことを使わせるとともに、考えさせる活動・推測力を育てる活動を仕掛けていくよう心がける。

以上のことから研究の方法として、前述した幾つかの教材を開発する必要がある。そこでこれらを開発する上での留意点・コンセプトを次に述べることにする。

4 活動の基本となる教材を開発する上での留意点

(1) Motivation について

「何のために英語を勉強するのですか？」このような質問を少なからず受けたことがあるのではないだろうか。この質問をする生徒は、たいてい英語が嫌いだったり英語の学習が嫌だったりするのである。裏を返せば英語の授業が理解できたり、興味深いものであったとしたならば、それが Motivation となって、英語学習を自ら進んで行うようになると考えられる。

Gardner は成績や高校受験等、実利的な利益を求めて学習する動機のことを「道具的動機づけ (Instrumental Motivation)」と呼び、英語そのものに興味があり、英語圏の文化等を積極的に受け入れたいと思い学習する動機のことを「統合的動機づけ (Integrative Motivation)」と呼んだ⁶⁾。そこで本研究会議では Instrumental Motivation を考え、その一つの方法を提案していくことにする。

(2) リスニング訓練 (Listening Training)

Listening に関する指導方法や教材については様々なものが存在する。そこで本研究会議ではその中でも Listening 指導の効率化をめざして開発された、文京女子大学教授、竹蓋幸生の「3 ラウンド・システム (3 Round System)」の指導理論⁷⁾を応用した教材を開発することにした。この System では、Listening Training の方法としての Skimming 法、Scanning 法、予測や推測能力を使う総合的な Training といった Top-down 的な Listening や個々の音の聞き取りをした後、順次大きな音声単位へと積み上げていく Bottom Up 的な Listening まで、すべてを網羅する System である。この理論は大学 Level では既の実証されており、中学校 Level での応用ができるのかどうか課題となる。

(3) リーディング訓練 (Reading Training)

Reading 指導には、語彙や文法というような言語的な情報を次々に重ねるようにして、内容を理解しようとする Bottom-up Reading と、Title 等も含めて文中のちょっとした語句を Hint に、書かれている内容を予想しながら読み取るようとする Top-down Reading、その両方を統合したような Interactive Reading がある。具体的な方法としてはパラグラフ・リーディング (Paragraph Reading)、スキミング (Skimming)、スキヤニング (Scanning)、フレーズ・リーディング (Phrase Reading) などが考えられ、そのいずれも役割が異なる。つまり、Reading 指導においても、偏った方法をとらずに、それぞれ目的に合った指導方法をバランスよく行なうべきなのである。

⁶⁾Gardner, R. C. and MacIntyre, P.D. 1991 Gardner, R. C. and MacIntyre, P.D. 1997

⁷⁾竹蓋幸生 竹蓋順子 「新しい英語教育『三ラウンド・システム』」 文京女子大学外国語学部・文京女子短期大学紀要 2001

(4)スピーキング訓練(Speaking Training)

Speaking 活動については現在、多種多様の取組がなされている。非常に Communicative な活動を仕掛けていくことができるが、その反面 Error をどこで訂正させたらよいか等の問題も数多く存在する。それらを極力減らし、生徒の英語の化石化(Fossilization)を防ぐ手段としては、教師一人一人の細やかな指導を継続的に行っていくしか方法がない。そのため本研究会議では Speaking の教材に関しては、Swain のアウトプット仮説(Output Hypothesis)⁸⁾と、Long のインタラクション仮説(Interaction Hypothesis)⁹⁾に基づく活動の一端としての提案をする。

(5)ライティング訓練(Writing Training)

Writing 指導には書き写し・Dictation・並び替え・置き換えなどの「制限型ライティング(Controlled Writing)」、Key Words を提示しそれを用いて書くなどの「誘導型ライティング(Guided Writing)」、指定された枠内での Topic について自由に文章を綴る「作文(Composition)」と、書いて伝えるという文章を綴る「自由形ライティング(Free Writing)」がある。学習活動が「制限型」から「自由型」へ移行するにつれ、学習者に Creativity と Originality が要求されることになり、それだけ高い語彙力・文法力・文章構成力が求められる。したがって、学習者の Level に応じて段階を設定していく必要がある。さらに定期試験や川崎市学習診断テスト、高等学校入試問題等においても Writing の力を試す機会が多いことから、より一層の効率的な指導方法を研究する価値は十分あるものとする。

語彙訓練(Vocabulary Training)

語彙の学習は英語学習において必要不可欠な部分である。しかし、これまでの英語教育では4技能の学習に関心が移ってしまいがちであったため、必ずしもそれに相応した学習時間が確保されてきた訳ではない。現行の中学校学習指導要領では必修 100 語を含めて 900 語程度を学習するように定めているが、教科書の中で使用されている語彙は様々で、その中には ALT でもめったに使わないような、他の語彙に比べて使用頻度がかなり低いものもある。Paul Nation and Robert Waring は Newton の中で、英語学習者が必要な語彙 Size は 2,000~3,000 語であると述べている。それらの基礎的な語彙 Size を習得すれば、全体の使用語彙の約 80~95%を占めると報告されている¹⁰⁾。

表4 語彙 Size の例とその使用頻度 (Based on Newton 1997)

若者向け小説中の語彙 Size	総語彙数に占める割合 (%)	日常生活上の語彙 Size	総語彙数に占める割合 (%)
2,000	90,0	1,000	72,0
2,000+ 固有名詞	93,7	2,000	79,7
2,600	96,0	3,000	84,0
5,000	98,5	4,000	86,8

また、これ以外でもあらゆるジャンルの書物を統計の対象にした複数の報告を見ると、「使用頻度の高い語彙」の 2,000 語の占める割合は少なくとも 85%で、さらに、話し言葉に限定すればこの 2,000 語だけで 95%以上を占めるとされている¹¹⁾。したがって、この初級段階の語彙 Level である 2,000 語を習得することで、基礎・基本の向上だけでなく中級 Level への移行も速やかに行えるとする。

そこで、中学校段階ではそのうち最も頻度の高い 1,000 語の習得を最低基準とし、それらを網羅した単語 List の作成に取り組んだ。なお単語 List 作成においては、「JACET8000」を参考にした。この上位 2,000 語で英字新聞の 75%程度、平易な読み物であれば 90%近くが Cover されるとしている¹²⁾。

⁸⁾Swain: Output Hypothesis 1985

⁹⁾Long: Interaction Hypothesis 1983,1996

¹⁰⁾Paul Nation and Robert Waring “Vocabulary size, Text coverage and Word lists” Newton 1997

¹¹⁾大喜多喜夫 『英語教員のための授業活動とその分析』 昭和堂 2004

¹²⁾大学英語教育学会(JACET)基本語改訂委員会 「JACET8000」 2003

また、Seal は語彙を明示的に教える方法として、「3Cアプローチ(3C's Approach)」を提唱している¹³⁾。3Cとは「意味の伝達(Convey Meaning)」、「確認(Check)」、「定着(Consolidate)」の3つの頭文字のことであり、教える過程においてこの3つの段階を経ることが語彙学習には効果的であると考えているものである。そこで本研究会議では川崎市立中学校で採用されている教科書とLinkさせつつ、この3C's Approachを応用した教材づくりをめざし、提案する。

文法訓練(Grammar Training)

文法の重要性については疑う余地はない。学校文法は英語学習者にとっては、便利な近道なのである。そこで日本の英語教育という風土の中で、より効果的で効率的な役に立つ英文法を定着させる方法はないかと考え、Drillとして継続性のある教材を開発した。

5 予備授業とその考察

以上のことを念頭に置きながら、研究のねらいを検証するために検証授業を行うことにした。しかし、検証授業をするに当たって授業 Designを構築するための Partsとなる教材が、果たして有効に機能するかどうかが大前提となってくる。そこでまず、そのことを確認するための予備授業を行う必要が生じた。そこで本研究会議で開発した教材の実用性とその有効性を検証するため、9月21日(水)にA中学校で、10月21日(金)にB中学校で様々な教材を用いた予備授業を行った。その中で得られたData(教科担任や生徒の感想、活動中の様子等)を分析し、教材をさらにより洗練・発展させようと考えた。

A中学校(3年生)

本時(L.4B)の到達目標:					
・現在完了形(継続用法)を理解し、自分の考えなどを正しく表現することができる。					
・Groupで協力し合いながら、学習事項を使ってCommunicationすることができる。					
・PairによるReading活動を通して、内容を理解し、Peruの文化を学ぶ。					
本時の授業 Design:					
Bera-Bera Talking	現在完了形(継続用法) 導入、練習	宿題脳トレ4段階法 (L.4B)	マシガン Writing	英単語テスト BINGO形式	まとめ
生徒の主な感想(授業後に行ったアンケートより)					
今日の活動は面白かった/いつもよりも楽しくできました/すごくつかれた/今日の活動は文法が頭に残りやすくてよかった/英語理解した/文法が理解できた/盛り上がった/楽しかった、単語を覚えられた/意外と簡単にできた/楽しかった、わかりやすい/私なりにとてもよく理解できました/集中してできた/発音が良かった					

図6 A中学校の授業 Design

B中学校(3年生)

本時(L.5B)の到達目標:					
・50マスDrillやPicture Cardsを見ながら、現在分詞の後置修飾の作り方を習得させる。					
・4枚の絵から自由に文章を作り、Groupで協力しながらいろいろな表現を考えさせる。					
・本文のSpeechの内容を2つのKey Wordsを手がかりに聞き取らせる。					
本時の授業 Design:					
リズム English	Bera-Bera Talking	read stories	後置修飾(現在分詞) 導入、練習	脳トレ8段階講座 (L.5B)	まとめ
生徒の主な感想(授業後に行ったアンケートより)					
腕が疲れる内容のものが多かった/ちょっと大変だったけど、いつもよりいろいろなことができてとてもよかったです/英語の授業楽しい/少し緊張したけど楽しくできた、またやりたいです/わかりやすく、これならテストもバッチリ!!/何度も言いながら文章を書いていると、いつの間にか覚えられてよいと思いました/単語の発音の仕方/脳トレはとてもよい					

図7 B中学校の授業 Design

¹³⁾Seal, B. "Vocabulary learning and teaching" in Celce-Murcia (ed) 1991

また、各中学校で行った活動を4技能とLevelとの視点からまとめると、次のようになる。

表5 A中学校の諸活動の区分

		難易度 (Level)		
		Level 1	Level 2	Level 3
4 技 能	聞く	Bera-Bera Talking	宿題脳トレ 4段階法	
	読む		宿題脳トレ 4段階法	
	話す	Bera-Bera Talking	現在完了形 導入、練習	
	書く	マシガ Writing	英単語テスト BINGO形式	

表6 B中学校の諸活動の区分

		難易度 (Level)		
		Level 1	Level 2	Level 3
4 技 能	聞く		脳トレ 8段階講座	
	読む	read stories	脳トレ 8段階講座	
	話す	リスニング English	Bera-Bera Talking	後置修飾 導入、練習
	書く		脳トレ 8段階講座	後置修飾 導入、練習

この予備授業では、「用意した様々な教材は有効に機能しているか」「道具的動機づけの教材は効果があるのか」をねらいとして行った。また、扱った題材から授業全体としてInput Trainingを中心に検証した。なぜならInput用教材の実用性と有効性を検証することは、その後のOutput活動を行うためのStepとして重要だからである。

2つの予備授業から確認できたこととして、次のことが挙げられる。アンケートや授業の様子から、用意した教材が生徒に好意的に受け入れられていた。英語が不得意な生徒でも、活動によっては活躍している場面が見られた。動機づけ用教材を各中学校で導入し継続してきたが、その効果が表れてきている様子が見えた。そこで、有効性が高いと判断し、さらに継続し観察することを確認した。

今回の予備授業を行って以降、本研究会議で開発したいろいろな教材を6校の7名以上の教師に試行を続けてもらい、より洗練・発展させていった。そして評価が平均以上のData(担当教師や生徒の感想、活動中の様子等)を得られた教材を精選し、検証授業に臨んだ。

6 検証授業とその考察

予備授業を経て、いよいよ研究のねらいを検証するための授業を行った。方法としては、前述した2種類のバランス(Input部での4技能のバランス、InputとOutputのバランス)を組み込みながら、2年生Lesson7(8~9時間分)を2通りの授業Designで行い、生徒の変容を見取るという方法をとった。2通りの授業Designとは、

- (1) 毎時間のバランスを考慮しながら、8時間の授業の中で を考慮する。(バランスA型)
- (2) 1ユニット(Lesson)の中で と のバランスを考慮する。(バランスB型)

であり、2つの中学校で同時期に実践した。

(1) 各学校の生徒の背景と様子

C中学校:各クラス21~22名で編成されており、中には海外からの帰国生徒も在籍している。地域や家庭環境も整っており、生活習慣、学習習慣が身についている。素直な生徒が多く、落ち着いた学校生活を過ごしており、学習に対する意識も高い。今回検証したクラスは、明るく積極的であり、英語学習に対して前向きに取り組む生徒が多いクラスである。知的好奇心が旺盛であるが故、準備不足の授業を行うとその反響も即座に返ってくるので、より考慮した活動を仕掛けていかなければならない。

D中学校:1学年7~8クラス38~40名の大規模校である。明るく人なつこい生徒が多く在籍しているが、学習習慣が十分に身につけていない生徒もあり、学習に対する意欲をもたせるところから始める必要がある。今回検証したクラスは全体的ににぎやかであるが、私語が多く、英語学習に対して抵抗を感じている生徒もいる。さらに2学期に入ると、生徒指導上の課題が生じることもあり、クラス全体が落ち着かないこともあった。

(2) 各中学校のL・7の授業 Design と1ユニット及び毎時間の授業の構成図

L・7 授業 Design ~ C 中学校 ~ 学年末の目標: クラス対抗のディスカッションをやる!!						
L・7の到達目標: Reading 分野; ある程度まとまった内容の英文(150語~300語レベル)を読んでおおまかな内容を理解し、自分の考えを書き、発表することができるようにさせる。/教科書の本文を、意味を考えながら読むことができるようにさせる。 Listening 分野; 教科書の内容を聞き、理解できるようにさせる。/話し相手の英語を聞き、評価できるようにさせる。 Speaking 分野; Thanksgiving Dayについて深く知るとともに、それについての自分の意見・感想をもち、5文~10文程度の英語で相手に伝えることができるようにさせる。 Writing 分野; 新出単語や Output 活動に必要なと予想される語彙の80%~100%を、全体の1/2の生徒が書け、2/3が言えるようにさせる。/不定詞の用法を理解・習得させ、それをういた文章を5~10種類作ることができるようにさせる。						
マシガンWriting (Writing Input)	Read Stories (Reading Input)	不定詞導入1 (Speaking Input)	25マスDrill (Writing Input)	不定詞練習プリント (Writing Input)	脳トレ8段階講座(L.7A前半) (Reading, Speaking, Writing Input)	まとめ
・1時間目 到達目標: 不定詞の作り方と名詞的用法の意味を理解させる。/L・7Aを生徒の2/3以上読めるようにさせる。						
マシガンWriting (Writing Input)	Read Stories (Reading Input)	脳トレ8段階講座(L.7A後半) (Reading, Listening, Speaking, Writing Input)	3 Step Listening (L.7A) (Listening Input)		まとめ	
・2時間目 到達目標: L・7Aを暗唱できるくらい深く読み込ませる。/L・7Aについてほぼ完璧に聞いて理解させる。						
マシガンWriting (Writing Input)	Read Stories (Reading Input)	3 Step Listening (L.7B) (Listening Input)		不定詞導入2	不定詞Drill Activity (Speaking Output)	まとめ
・3時間目 到達目標: L・7Bについておおまかな流れを理解させる。/不定詞の副詞的用法を理解させ、オリジナルの英文を3文以上作らせる。						
マシガンWriting (Writing Input)	Read Stories (Reading Input)	脳トレ8段階講座(L.7B前半) (Reading, Speaking, Writing Input)	リーディング・ジャッジ(L.7A,B) (Reading, Speaking Input)		まとめ	
・4時間目 到達目標: L・7Bの内容を把握させる。/L・7A,Bの本文を流暢に10回以上読み込ませる。						
マシガンWriting (Writing Input)	Read Stories (Reading Input)	脳トレ8段階講座(L.7B後半) (Reading, Listening, Speaking, Writing Input)	3 Step Listening (L.7C) (Listening Input)		まとめ	
・5時間目 到達目標: L・7Bの意味を完全に把握させ、ほぼ暗唱に近い形で言わせる。/L・7Cの内容をリスニングである程度まで理解させる。						
Read Stories (Reading Input)	不定詞すごろく勝負 (Writing Output)		脳トレ8段階講座(L.7C) (Reading, Listening, Speaking, Writing Input)	不定詞練習プリント (Writing Input)	まとめ	
・6時間目 到達目標: 不定詞を用いたオリジナル文を10文以上正確に作らせる。/L・7Cの内容を理解させる。						
マシガンWriting (Writing Input)	Read Stories (Reading Input)	リーディング・ジャッジ(L.7A,B,C) (Reading, Speaking Input)	クリップ・トークA(教科書内容編) (4技能統合型 Output)	クリップ・トークB(教科書発展編) (4技能統合型 Output)	まとめ	
・7時間目 到達目標: 内容について自分の意見をもち、5文以上言わせる。/相手の意見を聞き、その感想を的確に返答させる。						
マシガンWriting (Writing Input)	Read Stories (Reading Input)	クリップ・トークBのまとめ・発表(教科書発展編) (4技能統合型 Output)	RPG(教科書発展編) (4技能統合型 Output)		まとめ	
・8時間目 到達目標: 相手から得た情報を、自分なりの言い方で10文以上書かせる。/炔をなるべく見ないで堂々と発表させる。						

図8 C 中学校の授業 Design

L・7 授業 Design ~ D 中学校 ~ 学年末の目標: Show & Tell をやらせたい!!						
L・7の到達目標: Reading 分野; ある程度まとまった内容の英文(150語~300語レベル)を見ても、拒絶反応が起きずに読もうとする態度を身につけさせる。/教科書の本文を、意味を考えながら読むことができるようにさせる。 Listening 分野; 教科書の内容を聞き、理解できるようにさせる。/話し相手の英語を聞き、評価できるようにさせる。 Speaking 分野; Thanksgiving Dayについて知り、それについての自分の意見・感想をもち、2~5文程度の英語で相手に伝えることができるようにさせる。 Writing 分野; 新出単語や Output 活動に必要なと予想される語彙の80%~100%を、全体の1/2の生徒が書け、2/3が言えるようにさせる。/不定詞の用法を理解・習得させ、それをういた文章を2~5種類以上作れるようにさせる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	不定詞導入	25マスDrill (Writing Input)	不定詞練習プリント (Writing Input) まとめ
・1時間目 到達目標: 授業に対する生徒の視聴率を70%以上にさせる。/不定詞用法の作り方と意味をおおよそ理解させる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	3 Step Listening (ステップ1) (Listening Input)		まとめ
・2時間目 到達目標: 授業に対する生徒の視聴率を80%以上にさせる。/L・7Aの内容を、Listeningを中心に80%以上の生徒に理解させる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	脳トレ8段階講座(L.7A) (Reading, Listening, Speaking, Writing Input)		まとめ
・3時間目 到達目標: Listening, Speakingについて積極的に取り組もうとする生徒を80%にする。/L・7Aを暗唱できるくらい深く読み込ませる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	脳トレ8段階講座(L.7B) (Reading, Listening, Speaking, Writing Input)		まとめ
・4時間目 到達目標: Listening, Speakingについて積極的に取り組もうとする生徒を85%にする。/L・7Aを暗唱できるくらい深く読み込ませる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	脳トレ8段階講座(L.7C) (Reading, Listening, Speaking, Writing Input)		まとめ
・5時間目 到達目標: L・7Cの内容を理解させる。/L・7の本文を2/3以上の生徒が深く読み込めるようにさせる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	3 Step Listening (ステップ2) (Listening Input)		まとめ
・6時間目 到達目標: 不定詞を含めた英文を2~5種類以上作れるようにさせる。/より自由度の高い活動を、積極的に活動させる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	すごろく勝負(不定詞編) (Writing Output)		まとめ
・7時間目 到達目標: 不定詞を含めた英文を数種類以上言え、人の話を注意深く聞けるようにさせる。/さらに自由度の高い活動を、遊ぶことなく積極的に活動させる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	わらしべ長者(不定詞編) (Speaking Output)		まとめ
・8時間目 到達目標: L・7の総まとめをさせる。/L・7の本文をほとんどの生徒に深く読み込められるようにさせ、半数の生徒に1セクション以上を暗唱できるようにさせる。/L・7の本文を半数以上の生徒が書けるようにさせる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	Q&A「気持ちを一つに」 (Listening Input)	脳トレ8段階講座(L.7総復習) (Reading, Speaking, Writing Input)		まとめ
・9時間目 到達目標: L・7の総まとめをさせる。/相手から得た情報を、自分なりの言い方で5文以上書かせる。/自分の考えを自分なりの英語で、堂々と言わせる。/本文に関するその他の情報を自力で得させる。						
マシガンWriting (Writing Input)	英単語テスト BINGO形式	Bera-Bera Talking (Speaking Input)	RPG(教科書発展編) (4技能統合型 Output)		まとめ	

図9 D 中学校の授業 Design

上記の授業 Design の中で構成している諸活動を図にすると、表 7、8 のようになる。C 中学校では前述したバランス A 型を、D 中学校ではバランス B 型をできるだけ考慮しながら構成してある。ただし、当日の生徒の様子で授業の構成を急遽変更した時間があることも、つけ加えておく。

表 7 C 中学校の 1 ユニット及び毎時間の授業の構成表 (バランス A)

授業	Input 活動				Output 活動
	Listening Input	Reading Input	Speaking Input	Writing Input	
1 時間目		Read Stories 脳トレ 8 段階講座	不定詞導入 1 脳トレ 8 段階講座	マシンガン Writing / 25 マス Drill 脳トレ 8 段階講座	
2 時間目	3 Step Listening 脳トレ 8 段階講座	Read Stories 脳トレ 8 段階講座	脳トレ 8 段階講座	マシンガン Writing 脳トレ 8 段階講座	
3 時間目	3 Step Listening	Read Stories		マシンガン Writing	不定詞 Drill Activity (Speaking Output)
4 時間目	脳トレ 8 段階講座	Read Stories 脳トレ 8 段階講座 リーディング・ジャッジ	脳トレ 8 段階講座 リーディング・ジャッジ	マシンガン Writing 脳トレ 8 段階講座	
5 時間目	3 Step Listening 脳トレ 8 段階講座	Read Stories 脳トレ 8 段階講座	脳トレ 8 段階講座	マシンガン Writing 脳トレ 8 段階講座	
6 時間目	脳トレ 8 段階講座	Read Stories 脳トレ 8 段階講座	脳トレ 8 段階講座	不定詞練習プリント 脳トレ 8 段階講座	不定詞すごろく勝負 (Writing Output)
7 時間目		Read Stories リーディング・ジャッジ	リーディング・ジャッジ	マシンガン Writing	クリップ・トーキング A クリップ・トーキング B (4 技能統合型 Output)
8 時間目		Read Stories		マシンガン Writing	クリップ・トーキング B RPG・総まとめ編 (4 技能統合型 Output)

表 8 D 中学校の 1 ユニット及び毎時間の授業の構成表 (バランス B)

授業	Input 活動				Output 活動
	Listening Input	Reading Input	Speaking Input	Writing Input	
1 時間目	Q & A「気持ちを一つに」		Bera-Bera Talking	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式 25 マス Drill / 不定詞練習プリント	
2 時間目	Q & A「気持ちを一つに」 3 Step Listening		Bera-Bera Talking	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式	
3 時間目	Q & A「気持ちを一つに」 脳トレ 8 段階講座	脳トレ 8 段階講座	Bera-Bera Talking 脳トレ 8 段階講座	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式 脳トレ 8 段階講座	
4 時間目	Q & A「気持ちを一つに」 脳トレ 8 段階講座	脳トレ 8 段階講座	Bera-Bera Talking 脳トレ 8 段階講座	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式 脳トレ 8 段階講座	
5 時間目	Q & A「気持ちを一つに」 3 Step Listening 脳トレ 8 段階講座	脳トレ 8 段階講座	Bera-Bera Talking 脳トレ 8 段階講座	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式 脳トレ 8 段階講座	
6 時間目	Q & A「気持ちを一つに」		Bera-Bera Talking	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式	不定詞すごろく勝負 (Writing Output)
7 時間目	Q & A「気持ちを一つに」		Bera-Bera Talking	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式	わらしべ長者 (Speaking Output)
8 時間目	Q & A「気持ちを一つに」 脳トレ 8 段階講座	脳トレ 8 段階講座	Bera-Bera Talking 脳トレ 8 段階講座	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式 脳トレ 8 段階講座	
9 時間目			Bera-Bera Talking	マシンガン Writing / 英単語 7x7 BINGO 形式	RPG・総まとめ編 (4 技能統合型 Output)

(3) 各中学校の L . 7 の授業分析とその考察 (生徒側の視点、教師側の視点それぞれからとらえる)

生徒側の視点 : 毎時間行った Routine 活動の有効性について

今回行った授業 Design は 2 校とも、毎時間の前半に長期的到達目標に向けた Input 活動 (上表参照) を仕掛けている。これらは生徒にどう影響しているのかを、アンケートによる感想から把握した。もっとも象徴的なものを挙げると、まず C 中学校の Writing 活動では「手が痛い、つらい」「慣れてきた」「結構できた」と変化し、D 中学校の Listening 活動では「言ってることがわからない」「少し聞き取れた」「理解できるようになった」と変化している。生徒は自己の成長を実感するにつれ、それが自信につながり、前向きな意見へと変わったと考える。そして担当教師も手ごたえを感じている様子が、後述する授業者の感想より読み取れる。Routine 活動の有効性を示す材料としてとらえられる。

生徒側の視点 : 同じ教材を使用したときの生徒の反応に違いはあったのか

2 校が実践した授業 Design には、同じ活動を行った場面が幾つかあった。前述した通り、地域による格差が否めないという現実において、教材の有効性はどの程度あるのかを、ビデオによる生徒の様子、アンケートによる生徒の感想、授業者から見た生徒の様子 の 3 点から確認することにした。

今回共通して行った活動は「マシンガン Writing」「25 マス Drill」「脳トレ 8 段階講座」「3 Step Listening」「不定詞すごろく勝負」「RPG・総まとめ編」の 6 種類であった。両校の生徒とも、どの活動にも大変積極的に参加し活動している様子がうかがえた。また、アンケートにも前向きな感想が多く、特に「考えることがとても面白かった」「英語での問題を理解できるようになってうれしい」「ハッピーカードをもらいたかったので練習してきました」「単語の覚え方が身についてきました」などは、象徴的な言葉として大変印象に残る。さらに授業者からも手ごたえを感じていた様子が、後述する感想からうかがえる。これらのことから教材を精選し、仕組む時期を見分けさえすれば、同じ内容のものでも地域や学校に関係なく、生徒の反応に違いはないことがわかった。

生徒側の視点 : D 中学校の着目生徒の変容について

着目生徒 B についてである。この生徒は学習意欲が乏しく、授業に対する姿勢はあまり前向きではない。しかし、今回この生徒が驚くべき変容を見せることになる。L . 7 の最初の数時間は寝る遊ぶ人の邪魔をするという姿がしばしば見られた。しかし、Lesson が中盤にさしかかると活動によっては参加し始め、さらに後半では友達に教えてもらいに行く姿が見られた。そして終盤の 8・9 時間目ではついに劇的な変化が見られ、1 時間を通してすべての活動に参加していたのである。授業後のアンケートも無記入の状態から、「ウキウキする」「楽しくて、笑った」「むずかしかったけど楽しかった」等の率直な感想の記入へと変容している。担当教師もこの変容に驚いており、後の感想にもそのことを書いている。これは様々な角度から仕掛けていった諸活動、それに伴う教師の授業テンポの改善、ペアワークを多く取り入れたことによる友達のサポート等、いろいろな要因が考えられる。

生徒側の視点 : 教科書内容を発展させた Output 活動の有効性はどうだったのか?

a . クリップ・トーキングによる検証

C 中学校では 8 時間目にクリップ・トーキングの活動を行った。これは Speaking を中心に行う、4 技能統合型の Output 活動である。前時までに Input されてきた表現が、どのくらい生徒に Output されているかを見ることを、主なねらいとした。

表 9 クリップ・トーキングの実際の例

<p>Case 1 (クリップ・トーキング A) A: I want to eat something for dinner. B: Me, too. What was the name of the ship then? A: Its name is May Flower. What do you think about "Food Drive"? B: Th... think that we can simple thing to help other people. What does "Food Drive" mean? A: Pardon? B: What, what does "Food Drive" mean? A: Ah... students... bring... a can of food... to... school. What do you think about Thanksgiving Day? B: I think so... Thanksg... あ、ちがう、えーと we can eat many food in Thanksgiving Day. A: Me, too. B: Oh, you, too. (笑) じゃあ、will you explain Thanksgiving Day? A: ... B: Hurry up. A: Ah... we have a "Food Drive" ふふふ... at that day, だめかな..... sorry, I don't know. B: O.K. It's your turn. (ここでタイムアップ) あー終わっちゃった</p> <p>Case 2 (クリップ・トーキング B) C: My favorite national holiday is こどもの日. D: Why? C: First, it day isn't my birthday and it day isn't Christmas. But I'm given a present by my parents. Second, it is a national holiday. Because I can enjoy playing in a day. Third, I can eat だんご that day. (原稿あり) D: What's the present? C: I'm a ...えーと... あっ... robot, and dog, and cookie... It's your turn. D: My favorite national holiday is お正月. C: Why? D: First, I like cooking おせち. Cooking is very interesting. Second, we enjoy playing かるた. That is very interesting Japanese culture. Third, it's very exciting before that day. (原稿あり) C: What your favorite お正月 cooking? D: 数の子、春巻き... and so on. C: What program do you watch in お正月? D: 紅白歌合戦 C: OK. And... じゃあ... what food do you like singer? D: I... no... no... C: No? No? え、you watched a 紅白歌合戦? Do you have nothing えーlike a singer? D: Yes. (ここでタイムアップ)</p>

C 中学校では今回初めてこの活動を行ったが、その割に相手の意見をしっかりと聞き取ろうとし、そ

れに答えようとする姿勢が随所に見られた。全体として Communication を積極的に図ろうとする姿勢が感じられた。さらに会話の中にそれまでの Input 活動の成果が見られた。網掛け部は L . 7 の本文に出てくる重要表現である。この活動を数回繰り返していくうちに、より充実した Communication 活動を行うことができるようになる。

しかしその一方で、ブローケン・イングリッシュやスペル・ミスが目立ち、ときおり日本語交じりにもなってしまうことから、より正確な英語にさせるための教師の訂正のタイミング、生徒の日本語による思考からの脱却に対するサポートを考えていかなければならない。

b . R P G ・教科書総まとめ編による検証

この活動は3つの Level それぞれに20種類の課題があり、生徒はそれぞれ好きな Level を Choice し、その中から random で選ばれた課題を行っていく4技能統合型の Output 活動である。2校とも、最後のまとめとして行った。ここで紹介する Case は、C 中学校の2名の着目生徒の様子である。

表 10 R P G ・教科書総まとめ編の実際の例

<p>着目生徒 A :(Short Story を読んで解く課題を行う) 全然わかんないよ . . . え、わかんない 物語になってないよ . . . わかんない キーワードで考えるしかないなあ あ、わかった ! (教師の所へ) すごいすごい、なるほど。</p> <p>着目生徒 B :(日本の行事の一つを 10 文以上で書く課題を行う) 書いたらレベルを高くすればいいってことだよ (いきなり一番レベルの高い課題の一つである、日本の行事について書く課題に挑戦する) わかんない、お正月 ? (Hint を見る) 最初どう入ればいいのかわかんない (教科書を) 写していいのかな ? 花見について書くには . . . (教科書をいろいろめくって探す) 不定詞とかじゃなくて普通に書いていいんだよね ? 最悪の文章だ (じっくり見直している) なんだろ . . . (何回もいろいろなページを見ている) ひどいかも . . . (教師の所へ見せに行く) (教師から Hint をもらっている) そっか、こう書けば不定詞も入れられるのか できた ! ! (満足した顔で教師の所へ)</p>
--

この2名の生徒は共に、難易度の高い課題にあえて挑戦したためか、初めのうちは課題の内容が全くわからない様子であった。しかし途中、着目生徒 A は Key Words を抜き出し、着目生徒 B は Hint を参考に教科書の既習事項を見直すことを思いつく。さらに A は Key Words を見回しながら、Story の大意をつかむことを、B は使えそうな表現を抜き出すことで、自分で考えた Story に近づけることを知る。こうして課題に対する自分なりの結論を導き出すことに成功した。A は課題を6題、B は4題を取り組んだ。終了後の感想を見ると「難しかったけど楽しかった」と述べている生徒が多くいることから、少し高めのハードルを設定することができ、それを乗り越えることで得られる達成感・成就感をもたせることができたのではないだろうか。

本研究会議では、教科書の Output 活動には、生徒がこれまで培った知識や経験を生かしながら推測し、思考しながら行わせることが大切と考えており、その点では今回行った2種類の活動は、ある程度ねらい通りに行うことができたのではないかと考えている。

教師側の視点 : 教師のねらい (到達目標) は伝わったのか

毎時間2~3の到達目標を設定したが、C 中学校では毎時間平均で85%、D 中学校では毎時間平均で71%の生徒が教師のねらいを理解していた。これにより今回の授業で仕掛けていった諸活動には関連性があり、ねらいを達成させるために様々な方向・角度から仕掛けていっているものであったといえるのではないだろうか。そしてともすれば1種類の教材を用いて、それを長い時間引っ張りすぎたため、結果的に間延びした授業になってしまうことへの、一つの回答になるものとも考える。

教師側の視点 : 毎時間後のアンケート調査から気づいたこと (新たなバランスの発見)

アンケートの設問に「この時間で印象に残った活動は何か」と「この時間で勉強になったことは何か」がある。これは仕掛けていった教材が果たして「楽しくて身につく・ためになる」活動になっているかを見るためのものであった。平均で全体の約50%の生徒が「楽しいと感じた活動」として脳トレ8段階講座、Read Stories、Bera-Bera トーキングなどを、「勉強になった活動」としてマシガン Writing 等、別の活動をそれぞれ挙げている。つまり「楽しくて深い意味のある活動」と「勉強にな

る活動」をバランスよく配置し、統合的動機づけ(Integrative Motivation)へつなく必要がある。

教師側の視点 : L . 7 の指導 (8 ~ 9 時間) を終えての授業者の感想

(1) C 中学校

表 11 C 中学校の授業者の感想 (原文のまま)

- ・脳トレ 8 段階講座は生徒への定着が早い。
- ・50 分の組み立てが、生徒の状態に合わせて手持ちの中から選べるので、気持ち的にも楽。
- ・4 技能の比重は毎回変わるが、生徒の達成感があるので、Writing・Reading は routine で入れるといい。
- ・3 Step Listening は徹底して教科書を聞かせることができるし、Dictation や単語の学習になるので、効果がある。
- ・すごろく勝負、R P G 編は生徒の取組もよかった。
- ・1 レッスンに 8 時間は十分な時間で、生徒たちは本文をほぼ完璧に暗記し、自分なりの意見をもつことができた。
- ・Lesson 7 以外との比較では、生徒が英語の時間を楽しみにしているという時点で差が出た。
- ・単語の定着を図るために、4 月の段階から級別の単語テストを継続して行いたい。
- ・速読 Reading の W P M 値を出すやり方は、生徒たちの Motivation を上げるのにてきめん。
- ・英語が苦手な生徒も宿題脳トレ 4 段階法のおかげで、安心して授業に臨めるようになった。
- ・Happy Card は Motivation につながるので最高。
- ・少人数でも他の先生方と教材を合わせることができるので、とてもいい。

(授業者へのインタビューより)

Q : その後の生徒の様子を見て、何か気づいたことはありますか。

- A : ・マシンガン Writing を止めてみたところ、楽になったためか、生徒に気が抜けた様子や手持ち無沙汰な様子がかがえた。
- ・3 Step Listening をやらないときとやったときは、単語と単語のつながり (リエゾンをかける等) や文のリズム、抑揚のつけ方が極端に違った。また、この活動は Listening だけでなく、Speaking の訓練にも実はなっていることがわかった。
 - ・リーディング・ジャッジを催促される。
 - ・一番驚いたことは、生徒が「日本人同士で英語を話すことがバカらしいなんて思わなくなった」と言っていることである。
 - ・塾のほうで退屈になったと言っている。
 - ・英語の日記を書かせたときに、マシンガン Writing の効果が出ていた。
 - ・生徒が「先生、オレ時計を見なくなった」と言っている。時間を忘れるほど集中するようになったのだろう。

Q : L . 7 を終えてみて、先生自身が気づいたことがあったら教えてください。

- A : ・何より授業をするのが楽しみになった。
- ・教材準備の大切さを改めて感じる。
 - ・A L T が来るのも楽しみになった。なぜなら、すごろく勝負等、普段やっていることが 2 人で分担する形になるので、自分が楽になり、Special なものとして考えなくなったから。
 - ・授業のテンポがよくなった。
 - ・それぞれの活動に名前がついていることの大切さがわかった。
 - ・Input が少ない中で知っている単語だけを使って会話をさせていくと、生徒はいずれ英語が嫌いになっていってしまうのではないかと思うようになった。だからこそ、Input をどんどんさせて、常に新しい刺激を与えることが大切なのだと思った。

(2) D 中学校

表 12 D 中学校の授業者の感想 (原文のまま)

- ・脳トレ 8 段階講座をペアで盛り上がり、チャイムで途中で終わったとたん、全員で「あ～」のため息。こんなこと今までナシ!!
- ・「3 Step Listening」の Step 2 にて、「簡単!もう答えわかっちゃった!」「この前より聞こえる。」かなり有効です。
- ・寝る子がいなくなっただけでなく、授業に参加していなかった生徒が参加するようになってきた。(視聴率が上がった)
- ・今までの自分とは違うスタイルでトライしてみたが、生徒の今まで見たことのない反応に驚いた。
- ・全員が参加できる。(教材が丁寧に用意されているからだと思う)
- ・低学力の子の学習意欲が復活しつつある。
- ・教師よりも生徒が活動する時間が多い。(これぞあるべき姿だと思う!)
- ・何より私自身が楽しんでやっています(笑)。だから生徒も楽しいと思います。
- ・3 Step Listening を行うことで、Listening のコツがつかめると思う。課題が明確になっているので、全員の取組もよい。
- ・脳トレ 8 段階講座では、とにかく生徒が音読する!! いろいろなパターンを自由に組み合わせられるので、そのときの内容に応じて、変化をつけられる。また、Writing も組み合わせられるので、すごい!!
- ・べらべら・トークンでは何より子ども自身が話せるようになった気になる。1 年間で学習する事項が網羅されているのも good。
- ・マシンガン Writing は目標をもって書く作業に取り組み。書くことにより、単語力が絶対的に向上している。
- ・ハッピー・カードについては、特に低学力の子が喜んで集めている。すべての活動に効力を発揮している。また、レベルアップ認定証もステキ。挙手だけでは指しきれなかった子まで、カードを配ってあげられるので good。
- ・「気持ちを一つに」を始めると、みんな静かになり、そして盛り上がる。

(授業者へのインタビューより)

Q : 先生の書かれた文章 (上記) 以外で気がついたことがあったら教えてください。

- A : ・今回行ったような授業 Design で、1 年生のときから指導してみたい。これを 3 年間やったらすごいと思う。
- ・生徒は、学習習慣が必ず身につくと思うし、特に Reading の力をつけられます。
 - ・宿題脳トレはすごくいいと言っています。学習のガイドラインがしっかりできているからだと思っています。
 - ・Communication 活動については、R P G はその Lesson のまとめとしてすごくよかったです。
 - ・余計なことをやる生徒がいなくなりました。
 - ・間違えることに対する抵抗感が減り、Challenge しようという気持ちになっているのがハッキリわかりました。

Q : その後の生徒の様子を見て、何か気づいたことはありますか。

A : ・最初から英語を投げている生徒の取組が非常に前向きになってきています。

Q : L . 7 を終えてみて、先生自身が気づいたことがあったら教えてください。

- A : ・授業のテンポが良くなりました。もっと良くするようにしていきたいです。
- ・1 時間の授業の中で、より多くのことを活動させてあげることができました。
 - ・自分が教えている (から) 生徒を動かしている、生徒が学んでいる、に変わりました。
 - ・時間が経つのが早く感じました。英語好きな生徒だけでなく、一般の生徒たちも「えー、もう終わり? 」と言っています。
 - ・正直、以前は 45 分授業のときは、ラッキーと思っていましたが、今は授業時間が 50 分欲しくなります。
 - ・どんな生徒でも魅力的な教材とやる気を引き出してやれば、こちらが強制しなくても楽しそうにやるのだとわかりました。

教師側の視点 : 1 ユニット (Lesson) を授業 Design したことによる利点

C 中学校の授業者は 1 時間目を行う前に、朝から落ち着きがなくテンションの高い生徒たちの様子に気づく。そして急遽予定していた授業 Design を変更し、Writing 活動中心の授業 Design に組み立て直したのである。このとき授業者は、1 ユニット (Lesson) 分の授業 Design の中から、新たに立てた到達目標に基づく活動を幾つか Choice し、この時間に行う予定だった活動と入れ替えただけですぐに授業を行うことができた。このように状況に応じて活動内容を変えることができることは、今回の授業 Design の研究においてプラス の利点ではないだろうか。

研究のまとめと今後の課題

1 研究から見えてきたこと

目標を明確にし、普段からバランスのよい授業 Design を仕組んでいくことによって、予想以上のプラスの成果が上げられることが、今回の研究でわかってきた。プラスの成果とは、a . 4 技能それぞれに焦点を当てた活動、Input・Output それぞれに焦点を当てた活動をねらいに沿って仕掛けていくことにより、生徒の集中力を持続させ、全体的な底上げを図ることができる。b . 教師の発話量が減り、生徒の英語使用量が増える。これはすなわち使わせることの保障であり、生徒の英語の使用場面を保障することになる。c . 全体的に生徒の気持ちの変化が見られてきた。これは達成感・成就感をもたせる活動を多く取り入れたことによって、次への強い動機づけにつながっていったためではないかと考える。d . 「楽しく、深い意味をもつ活動」と「すぐに生徒が実になるとわかる活動」をバランスよく仕掛けていくことにより、生徒は意欲を失わずに、より高いハードルを越えようとする。そしてそれを乗り越えたことで次への学習の動機づけにつながる。e . 何より生徒以上に教師の変容が見られた。「自分が楽しんでやっている」「テンポが良くなった」等、教師の意識が変わり始めてきた。

また、魅力的な教材は地域・学校・生徒を問わず、有効に機能することもわかってきた。これにより、生徒に対してより前向きな働きかけを促していくことができるのではないかと考えている。

2 今後の課題

(1) 今回 2 通りの授業 Design を試みたが、そのどちらがより効果的だったかは残念ながら検証することができなかった。なぜなら検証途中で、急遽プランを変更せざるを得なくなる等、予想外の事態が多々起きてしまったためである。したがって今後の課題として引き続き検証していく必要がある。

(2) Routine 活動や Output 活動の成果は、短期間の研究では何とも言えない。したがって長期的な見取りを視野に入れながら、具体的な Data (Test 等の測定) を採るなどしていく必要があると考える。

(3) 今回の研究では短期的到達目標に沿ったものになったが、本来は長期的到達目標に沿ったものから授業 Design は行われなければならない。したがって長期的なねらいに沿った授業 Design を考え、実践していくことも今後の課題となる。

(4) 今回の研究では上述した、優れた授業づくりの条件のうち、短期的到達目標・授業 Planning・多角的な教材開発に焦点を絞ったものであった。したがってその他の、子どもの内面を敏感にとらえる力、自分の個性を生かした授業づくり、中・長期的な到達目標に沿った授業 Design の確立、指導技術の向上、的確な授業経営、英語力等を伸ばすための研究も今後の課題である。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- Canale, M. and Swain, M. “Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing.” *Applied Linguistics* 1 1980年
- Swain, M. “Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development, in Grass, S & Madden, C.(eds.) *Input in Second Language Acquisition*, Newbury House.” 1985年
- Krashen, S.D. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Longman 1985年
- Chomsky, N. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger. 1986年
- Herbert W. Seliger Elana Shohamy “Second Language Research Methods” 1989年
- 清川英男 『英語教育研究入門』大修館 1990年
- Gardner, R. C. and MacIntyre, P.D. “An instrumental motivation in language study: Who says it isn't effective.” *Studies in Second Language Acquisition* 1991年
- Seal, B. “Vocabulary learning and teaching” in Celce-Murcia (ed) 1991年
- Gardner, R. C. and MacIntyre, P.D. “A students contribution to second language learning, Part 1: Affective variables.” *Language Teaching* 1997年
- Paul Nation and Robert Waring “Vocabulary size, Text coverage and Word lists” *Newton* 1997年
- 竹蓋幸生 竹蓋順子 「新しい英語教育『三ラウンド・システム』」文京女子大学外国語学部・文京女子短期大学紀要 2001年
- 金谷 憲 『英語授業改善のための処方箋』大修館 2002年
- 高橋一幸 『授業づくりと改善の視点』教育出版 2003年
- 望月正道 他 『英語語彙の指導マニュアル』大修館 2003年
- 大学英語教育学会(JACET)基本語改訂委員会 「JACET8000」 2003年
- 小池生夫 他 『第二言語習得研究の現在』大修館 2004年
- 三浦省五 他 『教育データ分析入門』大修館 2004年
- 岡 秀夫 他 『「英語授業力」教科マニュアル』大修館 2004年
- 渡辺雅子 『納得の構造』東洋館 2004年
- 白畑知彦 他 『英語習得の「常識」「非常識」』大修館 2004年
- 大喜多喜夫 『英語教員のための授業活動とその分析』昭和堂 2004年
- 吉島 茂 大橋里枝 他(訳・編) “Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment” 朝日出版社 2004年
- 小寺茂明 吉田晴世 『英語教育の基礎知識』大修館 2005年
- 佐野正之 『はじめてのアクション・リサーチ』大修館 2005年

【指導助言者】

- 神奈川大学助教授 高橋 一幸
- 川崎市立中学校英語科研究部会長(川崎市立西高津中学校長) 齊藤 元
- 川崎市総合教育センター研修指導員 江幡 淳
- 川崎市総合教育センター指導主事 佐藤 剛

【研究協力者】

- 川崎市立南加瀬中学校教諭 碓谷芽久美